

新大病院たより

和

第41号

(標題：中野雄一 元病院長)

地域連携システムを導入しました

大学病院の役割のひとつは専門性の高い医療を提供することですが、そのためには地域の他の医療機関とスムーズな連携をとることが大変重要です。私たち地域保健医療推進部は、地域の診療所や病院から紹介を受け、入院治療を要する場合には早期に退院して社会復帰できるようお手伝いをする、あるいは療養やリハビリテーションが必要な際に適切な地域の病院へ転院の段取りをする、といった退院のお手伝いや地域の医療機関との連携業務を担当しています。

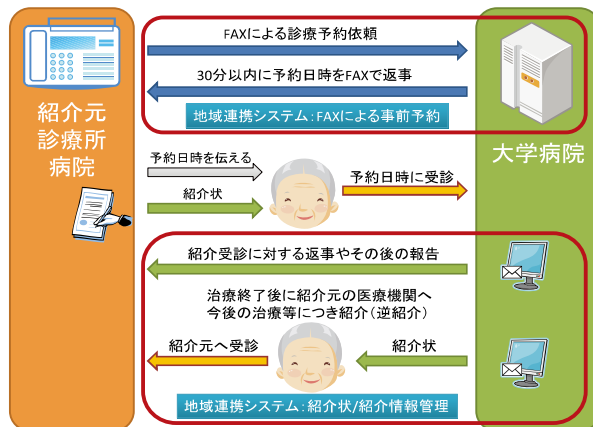
さて、皆さんが体の不調を感じた際に最初に訪れるのはかかりつけ診療所であることが多いでしょう。もし、そこでかかりつけ医が更なる検査あるいは手術が必要と判断した場合には病院など他の医療機関の受診を勧めることになりますが、その際患者さんの情報を次の医療機関に伝えるのが紹介状です。本院を受診する患者さんの約8割は他の医療機関からの紹介によりますから、紹介をスムーズに受ける仕組みを作ること、あるいは紹介状に対する返事、その後の経過の報告、そして治療終了後には紹介元医療機関に継続治療をお願いする等々、紹介にかかわる文書や情報を管理することはとても重要です。

本院では、平成23年1月より入院・外来とも電子カルテに移行しましたが、それにあわせて、上記のような紹介にかかわる仕組みや管理を電子カルテと一体として行う地域連携システムを導入しました。このシステムは大きくわけて二つの機能を持ちます。ひとつは、地域の医療機関が本院に患者さんを紹介する際に、あらかじめファックスで本院の予約をとるためのシステム、もうひとつは地域の医療機関情報や紹介状に対する返事やその後の文書のやりとり

を管理するためのシステムです。前者は患者さんの待ち時間短縮や外来診療効率の向上に役立つもので、現在は特定診療科のみの対応となっていますが、順次他の診療科にも広げていきたいと考えています。後者については、医師が紹介に関わる文書を効率よく記載し管理することが可能となり、地域医療機関とのより密接な連携体制の構築にも寄与するものです。

地域連携システムは、患者さんの目に直接ふれる診療機器や新しい治療法といった類のものではありませんが、地域において大学病院がその役割を果たし、患者さんが安心して医療を受けられるように縁の下の力持ちとして働いています。

(地域保健医療推進部 副部長 鈴木一郎)



冬の院内イベント

新大教育学部合唱団による音楽会

日時：平成23年11月12日(土) 場所：病棟大会議室



毎年恒例となった音楽会で、集まった患者さんやご家族に素敵な時間をお届けしました



日本の民謡や唱歌の合唱、楽しいショート・オペラも披露



寒い夜に灯る温かい光で、患者さんやご家族から大変喜んでいただけました

クリスマスイルミネーション点灯

期間：平成23年11月24日～平成23年12月25日
場所：病棟前広場



(財)協会の協力により、今年で6回目を迎えました

病棟サンタさん訪問

日時：平成23年12月19日(月)
場所：入院病棟



早めのクリスマスプレゼントをお届けした内山病院長サンタと記念撮影♪

口腔支持療法外来を開設しました！

本院では、医科と歯科がより有機的に連携して診断・治療にあたるべく、いろいろな工夫をしています。このたび、その一つとして歯科において「口腔支持療法外来」を立ち上げました。目的は、医科において行う全身の各種疾患の治療に伴ってお口に関連して現れる不快症状を、できるだけ軽減することです。そのため、医科での治療の始まる前から口の中を清掃し、感染源となるような虫歯や歯槽膿漏の管理・治療を開始します。医科での治療の全てで口の中に不快症状が出るわけではありません。対象となる病気およびその治療により出現する可能性のある不快症状は以下のようになります。

○口内炎（こうないえん）

：口の中の粘膜が弱くなり、食べ物がしみたり、出血しやすくなったりします。

例えば、各種のがんに対する抗がん剤、放射線治療の影響などで発症します。

○顎骨壊死（がっこつえし）

：主に抜歯などの後に傷の治りが悪く、顎の骨の一部が死んで骨が露出した状態になり、周囲に炎症（細菌感染）が生じます。

例えば、骨粗しょう症、がんの治療に用いるお薬の影響、放射線治療の影響など。

○感染巣（かんせんそう）

：口の中の微生物やその毒素が血液の中に入り、全身の弱い場所に影響します。

例えば、心臓の病気のある方の感染性心内膜炎など。

上記の、不快症状が出るような病気では、症状がひどい場合には治療自体を中断せざるを得なくなる上に、栄養摂取不良から全身状態が悪化することもあります。これらの不快事項は完全に消失できる訳ではありませんが、軽減させることで、治療の継続および口からの栄養摂取の継続が可能になります。

右の説明用のパンフレットが、医科の各外来に配布してあります。診療をお待ちの間に目を通していただき、少しでも気になりましたら、受付の方にお声かけいただければ幸いです。



（副病院長（歯科担当） 高木律男）

基幹災害医療センターに指定されました



東日本大震災時の本学DMATの医療救護活動

本院は、平成23年10月に、新潟県の基幹災害医療センターとして、新たに指定を受けました。

基幹災害医療センターとは、県内で15病院が指定されている災害拠点病院の中で中心的な役割を担う災害時医療救護活動の要です。

本院では、従来より、大規模災害において発災初期から被災地内での迅速な医療活動の拠点となるべく災害拠点病院（地域災害医療センター）に指定されていました。新潟県では、すでに長岡赤十字病院が基幹災害医療センターの指定を受けていましたが、これに加えてのこの度の本院の指定は、県内の災害医療のさらなる充実を図るものです。

基幹災害医療センターとして、今後は、平時においては災害拠点病院等の災害時医療従事者に対する災害医療の教育・研修・訓練を行い、災害時には医療班の派遣や災害拠点病院間の患者搬送の調整等、広域的な災害医療体制の中心を担っていきます。

衛星携帯電話搭載ハイエースを購入

本院ではこの度、衛星携帯電話搭載のハイエースを購入しました。

衛星携帯電話とは、人工衛星を利用した携帯電話です。災害時等、通常の携帯電話がつながりにくい状況でも通話可能となります。

今回の東日本大震災における医療支援の際、医療班の持ち込んだ携帯電話が不通となり、支援業務に大きな支障をきたしたことを教訓に、また被災地へより多くの物資を運べるように、この衛星携帯電話搭載のハイエースを購入しました。

衛星携帯電話搭載ハイエースの、これからの活躍をご期待下さい。



車両の上にある白いものがアンテナです



座席に搭載された電話機

中央診療施設紹介 ⑪

手術部

平成21年9月に中央診療棟が完成し、新手術室が稼働し始めてから約2年半経過いたしました。今回はこの新手術室を簡単に紹介させていただきます。

本院手術室は中央診療棟の2階と3階に位置し、3階（手術室10室）がメインの手術室で、2階（手術室4室）が歯科手術と局所麻酔の手術室になっています。本来、全室が同じフロアにあるべきなのですが、敷地面積の制限により、2階建て手術室にならざるを得ませんでした。ちなみに、1階の救急外来と4階の高次救命災害治療センターとは手術室内にある大きなエレベーターで上下につながっています。

本院手術室は、近年増加の一途をたどる内視鏡手術に対応した機器をはじめ、麻酔の設備（自動麻酔記録装置など）も最新の医療機器を導入しております。最初は皆が不慣れなこと、あるいはシステムそのものの完成度が低く、なかなか思い通りに動いてくれないこともありました。複雑な医療機器に囲まれ、医師・看護師も勉強しましたが、やはり機械に関しては臨床工学技士の方々が活躍してくれました。最近ではやっと、この手術室の本来の設計コンセプトである「高度な手術医療を行いながら、しかも患者さんにも、医師・看護師・臨床工学技士等コメディカルなどの職員にも優しい手術室」になりつつあります。

さて、近年の手術件数増加は驚くべきものがあり、平成22年度の手術件数は全身麻酔・局所麻酔の手術を含めとうとう年間7千件を超えました。それでもまだ手術待ち患者さん（手術室が空かないので手術の順番待ちをしている患者さん）

が多いというので、昨年7月から2階の本来局所麻酔手術用としてスタートした手術室の空き枠も使って全身麻酔の手術もできるようにしました。これで本院の手術室はほぼ限界まで使い切ったことになりますが、それでも緊急手術は昼夜関係なく入ってきます。本年度（23年度）の手術件数は昨年度より若干少なくなりそうですが、それでも7千件程度にはなりそうです。さらに、本年中にはドクターヘリも稼働し、それに関連する緊急手術も増えることが予想されます。

なお、本年秋に完成予定の新外来棟には主に局所麻酔による眼科の日帰り手術等を目的として、手術室を増設することを計画しています。

以上のように、手術部は毎年のように進歩し、新しい高度な手術機器が導入されていきます。しかし、それをうまく使いこなせるかどうかはやはり人間次第です。「大学病院の手術部」という期待と信頼に応えるべく、患者様が安全に快適に高度な手術医療を受けられるようにスタッフ一同がんばっています。

（手術部 部長 馬場洋）



CT付き手術室



麻酔器と手術ベッド



病気の基礎知識 ⑫ 接触皮膚炎

接触皮膚炎は、世に言う「かぶれ」です。

皮膚に触れた物質により生じる皮膚炎で、直接的な刺激をおこす物質により誰にでも起こりうる「刺激性接触皮膚炎」と、特定の人に起こる「アレルギー性接触皮膚炎」に分かれます。

アレルギー反応を起こす元となる物質を「アレルゲン」と呼びます。アレルゲンが皮膚に触れてから症状が出るまでは個人差がありますが、通常1～2日後から皮膚のかゆみ、赤み、ぶつぶつや水ぶくれが現れます。体の一部だけでなく、全身に現れることもあり、症状や広がりを見て診断します。

皮膚の症状に対しては、ステロイドをはじめとした外用薬、抗アレルギー薬などの内服薬による対症療法を行います。普段の生活で少しずつアレルゲンに触れ続けてしまうといつまでも治らないため、アレルギー性接触皮膚炎では原因を見つけることが最も重要です。

パッチテストは、アレルギー性接触皮膚炎の原因を見つける検査の1つです。検査はおおむね1週間かかります。初日に背中や腕に専用のテープでテスト品を貼り、2日後にテープを剥ぎ、赤みを見て、またその翌日にも反応を見ます。その後7日目までの反応で最終判定します。テープを貼った後の3日目までは入浴やシャワーができません。当科では、患者さんの症状や疑わしい原因物質

に応じて、外来ないしは入院で検査を行っております。

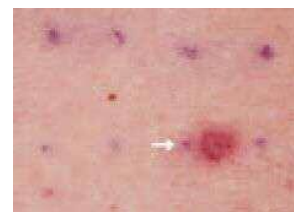
原因物質は、金属・化粧品・毛染め・シャンプー・スリッパや医薬品等々、多岐にわたります。「天然成分だから安全だと思っていた」「無添加だから大丈夫だと思っていた」とおっしゃる方がおられますが、思ってもいなかったものがアレルゲンだったこともあります。ウルシや銀杏は日本人の中でもかぶれることの多い物質ですし、添加物ではなく主作用物質でかぶれていたということもあります。

治りにくい湿疹がある方は、早めの皮膚科専門医の診察をお勧めいたします。

（皮膚科 助教 大湖健太郎）



頭皮に赤み、かさかさが見える



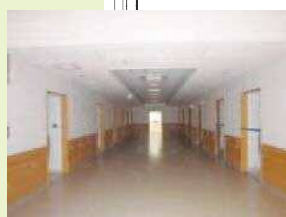
パッチテストでは、毛染めの成分である「パラフェニレンジアミン」で陽性であった（矢印の部分）

完成予想図



新外来棟 24年11月開院!

現在、どんどん建設中です



外来待合廊下 (24. 3撮影)



各科外来受付 (24. 3撮影)



東側道路から見た外観 (24. 3撮影)

屋上ヘリポート (23. 11撮影)

工事にともない、駐車場の縮小等ご迷惑をおかけしております。
ご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

看護部・事務部(医事課を除く) 移転のお知らせ

病院再開発計画にともない、看護部・事務部(医事課を除く)は旭町総合研究棟2階に移転しました。ご用の際は、お間違えのないようよろしくお願いいたします。



岩手県宮古市より 医療派遣のお礼をいただきました!

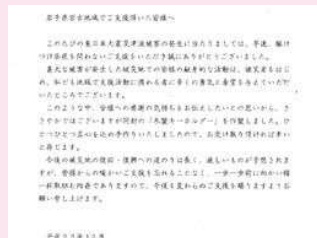
本院では、東日本大震災の医療支援として、平成23年3月5日から一ヶ月にわたり、医療救護班を岩手県宮古市に派遣し、市内の避難所への夜間巡回診療等の活動を行ってきました。

昨年末、岩手県宮古市より、この医療支援に対してお礼の「木製キーホルダー」をいただきました。ひとつひとつ手作りの温かみのあるキーホルダーは、医療救護班全員に配付されました。

宮古市の皆さま、いまだ大変な中で心のこづかし、大変ありがとうございました。本院では、今後とも被災された方々への可能な限りの支援を行ってまいります。



表に「絆」、裏に「ありがとう!!」の文字入りのキーホルダーを、医療救護班全員分いただきました。



同封いただいたお礼の手紙

新大病院たより「和」のバックナンバーは本院ホームページ
(http://www.nuh.niigata-u.ac.jp/byouin/08_koho.html) をご覧ください。

発行 新潟大学医歯学総合病院広報委員会

(お問い合わせは総務課総務係 電話 025-227-2407,2408まで)